有希有アタックス

ッ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
有希有アタックス

【Ｎコード】
Ｎ８２９４Ｖ

【作者名】
ッ

【あらすじ】
清條有希有にフラれた藤原一希は文芸部の協力を得て、再び清條にアタックを開始するが――。文芸部の仲間の協力を得た一途な少年藤原一希がライバルを倒し、清條有希有に告白する、甘酸っぱさ極力排除系バトルラブコメディー。

00001（前書き）

きっと、ちゃんと書き切りますので、読んでいただけると、助かります。

00001

記憶喪失というのは、随分昔から盛んに小説やらドラマやらで使われているけれど、思うに、最早、フィクションの世界では風邪をこじらせるキャラクターよりも、記憶喪失持ちのキャラクターの方が多いのではないだろうか。某大学文学部に入学してからというもの変に小説家然としているうちの姉は、記憶喪失持ちという設定を見ただけで見る気が失せて、頭を壁に打ち付けたくなる衝動に駆られてしまうらしい。彼女に言わせると、記憶喪失なんていう設定は作者の手抜きなのだとか。おとといの夜も、不気味な物音が聞こえると思って、リビングに向かったら、姉が壁に頭を打ち付けていた。時間は午前一時過ぎ。テレビに目をやると、深夜アニメをやっていた。姉を制止しながらアニメの音声を聞いていると、どうやらこの主人公も記憶喪失らしい。見なきゃいいのに、と言ったら「声豚の使命なのよ！」と意味不明の事を言われた。

まぁ、そんなだから、まさか僕が記憶喪失になってしまったと知ったら、姉は何を仕出かすかわかったものではない。

……そう。

話はだいぶそれたが、僕は記憶喪失になった。

現在進行形で、である。

記憶喪失なう。

気が付くと教室で机と机の間に仰向けになって、天井を見つめていた。

何故か、倒れた机が腹の上に乗っている。

何があったのか、どうして倒れていたのか、考えてみるが、どうしても思い出せない。

記憶喪失という言葉が頭に浮かんで、すぐに「ここはどこ？　私は誰？」という、お決りの自問自答をしてみるが「火ヶ梨（ひがなし）高校一年B組の教室。藤原一希（いつき）」と、ちゃんと答えられた。ということは、

記憶の一部だけが飛ぶタイプのものなのか。

何にしても、とりあえずこの教室を出なければ、と立ち上がろうとするが、全身が酷く痛む。腹の上の机さえ動かせないほど、腕にも力が入らなかった。くそッ、このまま明日までクラスメートが登校してくるのを待つ他にないのか……と、諦めかけた——そのとき。

教室後方のドアが勢い良く開く音。何者かが教室に走りこんできた。身を起こそうとするが、やはり力が入らない。しかし視線だけを動かすと、スカートから伸びる紺色のハイソックスに包まれた脚が見えた。女子だろう。……もしかしたら制服姿のオジサンかもしれないが、そうなると僕は今以上に窮地に立たされる恐れがある。ここは違うと願いたい。

彼女（もしくは彼）は僕に気付く様子もなく、そのまま、僕が倒れている近くにある机の前で立ち止まると、机の中を漁りだす。

——と、この距離に来てやっと、僕には彼女が誰なのかがわかった。

顔は見えない。

しかし、僕だけが持つ特殊能力なのか、はたまた世の男殆どが身に着けている能力なのかは定かではないが、僕には女子中高生の足を見ただけで、それが誰であるかわかるのだった。例えば、この足首のくびれ具合とふくらはぎの形……うん、玉木真利（たまきまり）で間違いない！　という具合に。

彼女が玉木だということは変態こすぷれゐやーの線が消えたということである。声を出さずにいる意味は無くなった。このチャンスを逃すと、本当にこの教室で夜を明かすことになりかねない。僕は残っている力の全てを振り絞り、叫んだ。

「玉木ッ！　助けてくれッ！」

「ふぁあああああああああああああああああああああ！」

物凄く驚かれた。玉木は胸ポケットからメガネを落としてドアに向かうと、パニックに陥って、自分で開ければいいのにそれがわか

らないらしく、閉まったドアを叩いて、出してぇ、出してぇ、とひたすら泣き続ける。その後、掃除用具入れから取り出した箒（T↑こういう形のヤツ）をさすまたみたいに構えて戦闘態勢から、ふと思い至ったように、

「ふっ、藤原ッ？」

と濡れた声で言った。

気付くの遅いよ、と脳内でひとりごちながら、僕は片手を挙げる。あっ、という声。しばらくして、玉木が僕を覗き込んだ。机を重そうに脇によけて、僕の身体を抱き起こしながら、

「……ごめん、私、もう誰もいないと思ってたから、少し驚いた……。身体、大丈夫？」

と言って、僕を近くの椅子に座らせる。いつもはキツイ性格の玉木が動揺しているのは、中々面白い。

「ああ。それよりも僕がどうしてここに倒れていたか、知らないか？　……どういうわけか、思い出せないんだ」

壁掛けの時計を見る。四時過ぎ。ホームルームが終わってからもう一時間近く経過している。ああ、でも今日は掃除当番だったんだっけ。掃除をしていた記憶はあるから、記憶がない時間は４５分程度ということになる。

空白の４５分間。

僕の身に何が起こったんだ？

時計から目を離し玉木を見る。と、大きな目をより一層大きく見開いて、僕を見つめている。

「私も掃除当番だったから、見てたけど。……そんなにショックだったんだね」

「どういうことだよ。……まさか、何が起きたのか、知っているのか！？　頼む、教えてくれ」

「――そういうのあんまり詳しくないんだけど、でも、藤原の場合、多分、心がロックをかけてるんだと思うんだ。だから、無理に思い出さない方が……」

「構わない！　このままじゃ、姉が、姉が何を仕出かすがわからないんだ！」

具体的に言うと、家の壁が壊れるのが先か、姉の頭が割れるのが先か、という事態が発生するのだった。んなこと、言えるわけがない。

玉木は「お姉さんが……！？　でも、何でお姉さんが！？」と、しばらく悩むような素振りをするが、やがて覚悟を決めたようになずいて、消え入りそうな声で言った。

「掃除の時間に、藤原が清條さんに……」

――清條。

フラッシュバック、というやつだろう。その名を聞いた瞬間、さまざまな情景が頭の中を駆け巡った。

掃除の時間、教室。

衆人看視での、愛の告白。

「清條、僕は君が好きだ、好きすぐる！　――――ッグファ！」

ミゾオチに突き立てられた箒（T↑こういうヤツ）の柄。

風切り音と共に迫る白い上履き。

右頬を抉る、鋭い痛み。

そうか。

そうだった。

やっと思い出した。

僕は掃除の時間に清條さんに告白して、フラれた上、全身を突きまわされ、蹴りまわされ。それからずっと倒れていたってわけだ。

清條さんにフラれたというのは、かなりショックである……が、今は目の前に玉木がいる。気を使わせるのも嫌なので、気丈にふるまわなければ、と思った。一通り身悶えた僕は、思い切って、話題を変えることにした。

「ハハハッ！　あんなの気にしないぜ！　ところで、玉木は何をし

に教室に戻ってきたんだい？　だいぶ急いでいたみたいだけれど？」
外国映画の三枚目おとぼけ担当キャラみたいな口調になってしまった僕の突然の変化に、玉木は、えッ……と戸惑うが、すぐに僕の心中を察したようで
「ええっと、私はこれを取りに来たんだよ。ほら」
と胸に抱えていたクリアファイルを差し出す。受け取って、中身を取り出すと、Ａ４用紙に大量の文字が印刷してあった。どうやら小説の原稿ようだ。そういえば、玉木は文芸部だったっけ。僕は適当にページをめくりながら、飛ばし飛ばしで読んでいく。しばらくして、何の気なしに
「どんな小説なの？」
と訊ねると、落としたメガネを胸ポケットにしまおうとしていた玉木の動きが、ふと、完全停止。何も言わない。仕方なく、自分で、ちゃんと読んでみることにする。一分ほど経って、玉木が小さく
「まだ書きかけだけど、ラブコメディー……」
と、小説を読み続ける僕に呟いた。彼女は多分、フラれたばかりの僕にリア充が乳繰り合う小説を見せてしまった自らの失態を後悔し、自責の念を募らせていたのだろう。
けれど。
そんな配慮は不要だった。むしろその時、僕は彼女の小説を読んで、新たな光を見出したのだから。
「おい、玉木！　今すぐ文芸部に行くぞ！」
「えッ、何で藤原が文芸部に……？　って、ちょっと待って！」
玉木の手を引き、教室を飛び出す。さっきは立ち上がる力も無かったのに、今は新たなエネルギーが僕を突き動かしている。早く、早く、走ることができた。
「僕の生きる希望、清條さんに掛ける思いが僕の中で再燃しだしたんだ。ああ！　空洞だった左胸に、確かな確信が湧き上がるぜ。わかるんだ。今度は絶対にうまくいく！」
そう言って、雄叫び。後ろを走る玉木がそれを聞いて楽しそうに、

きもッ！　と叫んだ。

００００１（後書き）

評価・感想がいただけると、……ありがたいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8294v/

有希有アタックス

2011年8月31日03時16分発行